

WINE

Magazine

英語 (WINE) と併売
週刊 (HOTEPRESS) 9月24日号別冊

1999 vol.6
1200 yen

Piemonte / Italy

カオス
ピエモンテ伝統と革新の混沌

Introducing
Focus on Fashion
by Helena Matheopoulos

exclusive interview with
小澤征爾 **Seiji Ozawa**

イザに飲むならこの1本
Millennium

市川猿之助

やりたいことをやり尽くして
使命感から楽しみの世紀へ

歌舞伎のエンターテインメント性をクローズアップする体を張った宙吊りや、舞台技術の先進性を駆使して見せた「スーパー歌舞伎」、さらに海外での成功など、伝統的な歌舞伎の世界において、その革新性、独自性で20世紀をリードしてきた市川猿之助さん。世紀を超えたスーパースターの、2000年を目前にしての世期末インタビュー。次の1000年へのスケールの大きな計画は、もう実行間近といったところだった。

感動の持続力

さて、いよいよ2000年が目の前に迫っていますが、猿之助さんにとって20世紀はどんな世紀だったのでしょうか。

歌舞伎の歴史を振り返ってみると、伝統的な型を重んじながらも、常に新しい創造を行った役者がいたものでした。それが、戦後になってから、伝統を尊重するあまり、それを壊そうとする人間がひたすら出ていかなかったのです。

そうした状況が、私に使命感のようなものを生んだのだと思います。自分の会をつくり、それまで誰もやらなかったことに挑戦し続けてきたのは、そのためなんです。ただし、それは全く勝手に作り上げるのではなく、やはり歌舞伎の型を踏まえたうえのものなのです。

伝統の世界というのは、創造の部分がとてもなつてこそ、人々の感動を呼ぶ。江戸中期のある漢学者は、「人は感動して涙をこぼすとき素直な気持ち

になることができ、知らず知らずのうちに向上心を持つ」と言ったといいます。そして、「ものを考えることを始める」とも。

私は、そうやって人がものを考えること、英知が新しい時代を切り開いていくのだと思うのです。ですが、そのときは感動に酔いしれていたとしても、また、それをすぐ忘れてしまうのも人間です。だから、私たち表現者は常に人を感動させ続けなければならぬ。そのための挑戦に次ぐ挑戦だったのです。

そうですね。例えば選んでも、よいレストランというのはいつもお客さまに愛されてにぎわっていますよね。

そう、食べることも大いなる感動です。私も食べることにかけては、人一倍好奇心旺盛なほうですよ。よいレストランとは、やはり、どこかに感動があるレストランなのです。勢いがある。人が集う生のインパクトがあるのです。

私が、芝居にこだわるのも、生のインパクトの強さに引かれるからです。そのなかで、創作も古典も、やりたいこと、好きなことをもう全部やっちゃったと思っています。

世紀を超えて

それでは、これから21世紀に向かって、猿之助さんはどのような計画をお持ちなのですか？

これまで私は、自分の体を使って自分の好きなことをしてきましたが、これからは他人の体を使って自分の芸術表現をしていきたいと思っています。ダ

ンスの世界のモリスベジャールのように。そうしたことを念頭において、若手俳優たちを集めた「二十一世紀歌舞伎組」を旗揚げしたのです。やはり役者は体が資本です。これまでの私の20世紀の活躍は、自分の体で作ったものでしたが、これからはそうもいきません。だから、他人の体を使つて、考えようのです。

そして、21世紀はもっと楽しくものを作りたいと思うと思います。これまで、私を突き動かしてきた使命感は、ある意味では悲壮感をともなうものでした。だから、これからはそうしたものを解放されて、楽しくやっていたいのです。

これから担う若手の方々をはじめ、また海外などで、多くの出会いもありますよね。

ええ。私は海外での公演や大学でのゼミの演劇教室などで、楽しい出会いをたくさん経験してきました。ですが、私のやってきたことは、教えようと思つて教えられるものじゃない。

今の人たちは、やはり飽食の時代の申し子だと感じます。育ちがいい代わりには欲を持たない。それはいい意味でもあるのですが、私の修業時代とは大分違いますね。私は「これぞ」という人には密着して、盗んだものです。「教えてくれ」と言っても教えてはもらえないし、日常的な何気ないシーンで、とんでもない芸の核心のような言葉がぼろりと飛び出してきたりする。だから、ずっと後について離れませんでした。

それから、骨董屋の小僧じゃないけれど、いものに常に触れているということも必要でしょう。明治の初めや戦後に「西洋に倣え」で拾

てしまった日本古来のもの、邦楽や日本画などの素晴らしいもの、もっと知ってほしいと思います。

21世紀には、かえってそうしたものが再発見されるかもしれませんね。

ええ。日本画の余白、能の無駄な部分をとんとんそぎ落としていく美学。そうしたもののへ憧れは、私にも強くあります。そんな好奇心が、21世紀にもっと素晴らしいものを生んでいてほしいですね。

市川猿之助

いちかわえんのすけ

1939年、三世市川段四郎の長男として生まれる。47年、三世團子を襲名し初舞台。63年、三代目猿之助を襲名。66年より、活動の場として「春秋会」「おもたか会」を主宰し、「猿之助歌舞伎」の基を作った。68年、国立劇場にて「義経千本桜・川蓮法師」の猿忠役で宙吊りを復活し、脚光を浴びる。その後も、古狂言の復活など独自の活動で知られ、さらに最先端の舞台技術を駆使した「スーパー歌舞伎」を創造。常に「現代に生きる歌舞伎」をテーマに未来の世界を創り続けてきた。86年、初演のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」では、歌舞伎界の常識を超える観客35万人を動員。既に7作のスーパー歌舞伎の台本、演出、主演をこなした。海外での評価も高く、座頭として77年の訪米歌舞伎をはじめとして、多くの公演を成功。また、84年のパリ・シャトレ劇場での公演をきっかけにオペラの世界へも進出。歌舞伎を根底にした演出が話題をさらう。88年には、門下の若手俳優で組織する「二十一世紀歌舞伎組」を旗揚げし、現在、「市川猿之助歌舞伎公演」と交互に全国公演を行っている。

今年、秋以降の公演としては、9月5日・10月26日/スーパー歌舞伎「新三国志」大阪・松竹座、10月31日・11月25日/猿之助歌舞伎「通し狂言」徳義先代蔵、全国公演、12月2・26日/歌舞伎座（演目未定）を予定

